

## 核構造データ・サブワーキング・グループ 会合

日 時 : 昭和55年7月23日(水) 13:30~17:30  
7月24日(木) 9:10~17:00

場 所 : 日本原子力研究所 東海研

出席者 : 喜多尾(放医研), 神戸(東工大), 松本(原研)

### 議 題

#### 1. $A = 128$ 核構造データの評価とファイルの作成作業

a) 特に  $\beta^-$  崩壊, 電子捕獲崩壊データを中心として, ファイルの作成作業を進めた。その主なものとしては,

$^{128}\text{In}$  (0.9秒3+アイソマー)から $^{128}\text{Sn}$ への $\beta^-$ 崩壊,

$^{128}\text{In}$  (0.9秒(8)-アイソマー)から $^{128}\text{Sn}$ への $\beta^-$ 崩壊,

$^{128}\text{Sn}$  (59.1分)から $^{128}\text{Sb}$ への $\beta^-$ 崩壊,

$^{127}\text{I}$  (n, r)  $^{128}\text{I}$ による $^{128}\text{I}$ の励起状態,

$^{128}\text{I}$  (25分)から $^{128}\text{Xe}$ への $\beta^-$ 崩壊,

$^{128}\text{Cs}$  (3.6分)から $^{128}\text{Xe}$ への $\beta^+$ , 電子捕獲崩壊。

これらについて評価プログラムによるファイルの評価更新作業を行い問題点の議論を行った。

b)  $^{128}\text{Te}$  関係はデータが多く作業が遅れている。この評価における問題の1つとして,  $^{128}\text{I}$ から $^{128}\text{Te}$ への電子捕獲崩壊と,  $^{128}\text{Xe}$ への $\beta^-$ 崩壊の分岐比を再検討する必要がある。これらについては1960年代の古い実験を基にして, 前のNDS(1973年)が値を求めているが,  $^{128}\text{I}$ の $\beta^-$ 崩壊の新しい実験においても分岐比に関してはそれを借用しているだけである。新しいr線強度と古い実験による $\beta^+$ , X線の強度比を用いて評価のし直しを試みたが詳細に関しては次回までに結論を出す。

2. 評価作業は各自の分担部分を引続を行う。